

山内瑛姫の晩年（5 終）

—玄冬—

第75回（昭和43年卒） 青柳明子

「大正10年8月5日の夕刻から降り出した雨は夜に入りますます強く、翌6日の4時頃から河水が張り、正午ごろには三川橋の量水標が10尺7寸を示し、増水はいよいよ急となった。午後1時、斎村斎藤河原地内赤川外堤防200間が決壊、午後5時には内堤防90間が破れ、伊勢横内およびその附近の部落は全く水に没し熊出の堤防も破れ山添方面から流れてきた水と合流して鶴岡を襲った。これより前、赤川の逆水が内川を押し、既に市内の低地に浸水していたが、夕刻に至って伊勢横内の堤防を破った水が恐ろしい勢いで市街地に殺到したので、鶴岡市内の約3分の2が水浸しとなり、夜に入っても増水は止まず、家畜の悲鳴があちこちに聞こえるなど凄惨を極めた。翌7日午後1時頃から漸く減水を始めたが、規模の上からも被害の上からも古今未曾有のものとなった」（『鶴岡市史 中巻』）

檜物町ではおよそ106戸が床上浸水した。瑛昌院の住む檜物町邸もこの災厄から逃れることはできなかった。「酒井忠悌日記」の8月6日分にはただ一行「大洪水・・・襲来」と記されているのみで、出水の具体的な描写はない。日記の再開は8日からである。

「午前5時半起床、午前中は林友（林友次郎）と共に畳干し、片付け、ふき方に従事。高正（高山正雄か）、中政次（中田政次）、赤経（赤沢経吉）、林雄（林虎雄か）、手伝い来たり。大いに尽力し貰ふ。本日初めて釜にて木豆（枝豆）をゆで、夕食のご飯も出来、また井戸も清潔になる。午後9時前人皆帰り、今晚は赤経泊まり呉る。夜初めて入浴す。心よきこと限りなし。紙漉町、鳥居町、榮町方面の惨状聞けば聞くほど悲惨なり。荘内の号外初めて来る」

檜物町邸には、人手も多く集まり、急ピッチで復興が進んだようである。その後も雨戸干し、布団干し、土蔵片づけなどが進んでいった。13日からは大工2名が入り、新しい床板を張り、畳を敷き詰めた。この間、瑛昌院はどうしていたのかというと、8月16日の日記に「家中新町に行く。一時頃腕車にて御帰宅。恰も出水の日より十日目なり」とあるので、被害のなかった家中新町邸に早々に避難していたことが分かる。

8月28日に「大洪水に際し尽力せし諸氏に対し慰労会」を開いた。また家の中のこまごました片づけを手伝ってくれていた女性が帰ったのは、31日になってからだった。その後も夜間に大きな雨音がすると、洪水を思いだして眠りが浅くなるなどということがあったようである。まさに大災害であった。

大正11年（1922）、瑛昌院は82歳になる。この年は冬の寒気が強く、2月下旬から流行性感冒が蔓延した。檜物町邸でも忠悌はじめ、妻の留尾も罹患し、ついに3月初め瑛昌院も高熱を出した。留尾と瑛昌院には肺炎の症状も出て、回復にほぼ一月を要した。この感冒が後の二人の健康に及ぼした影響は深刻なものがあつた。ことに留尾は元日に次男で第三子を出産したばかりで、体力もまだ本復しない時期での罹患だった。4月下旬には二人とも一応回復したが、留尾の方はこれ以降、床につく日が増えていった。

恒例の4月1日の稲荷社祭と瑛昌院のお誕生祝いも5月13日に延期されたが、例年と同じく町内の子供たちに菓子が振舞われた。また5月6日には「母上様御全快につき、御見舞の人々へ紅白の餅を配る。数三百余個なり」とあつて、瑛昌院は何とか持ち直した。

6月4日、そろそろ梅雨の候ではあったが、まだ爽やかな晴天の日の午後1時過ぎ、家中新町邸から、酒井家の当主忠良（ただなが）が檜物町邸を訪れた。「良兄様御出。新着の筑前琵琶『本能寺』を御聞（おきかせ）。間もなくお帰り。」と日記にはある。

実は前年の6月下旬にも、忠良は瑛昌院に琵琶を演奏しに訪れていた。その時に「此の頃御求めになりし筑前琵琶」とあるので、この時の「新着」は琵琶でなく、譜面であったと推察される。

大正時代は琵琶曲が流行していた。『邦楽百科事典』によれば、楽器としての琵琶の歴史は長く、平家琵琶、薩摩琵琶、筑前琵琶の三種に大別され、それぞれ琵琶の構え方も、演奏法も違いがあるようだが、ここでは割愛したい。薩摩琵琶は質実剛健な「土風琵琶」として、薩摩の武士階級の間に行われたという。

この日、瑛昌院の前で忠良が演奏した「本能寺」は「薩摩琵琶、筑前琵琶の曲名。ともに小田錦蛙作詞、作曲者不明。近代の作品。明智光秀の反逆、織田信長の最期を語り、前後に『本能寺溝深幾尺・・・』の漢詩と、『とぎ得たる心許すな増鏡 思はぬ塵のかかる世の中』の和歌をはさむ。親しまれた曲で、錦心流では名曲の一つ」（『邦楽百科事典』）である。また同書には「物語そのものの興味もさることながら、その本来の動機は死者への鎮魂にあったと思われる」とあり、また藤内鶴了著『続日本近代琵琶の研究』にも、「琵琶歌はそのほとんどが戦争についてであり、悲劇や苦悩について歌っている訳で、栄華などは歌われることはありません。つまり、物語の本質は哀れさにあり、無常さにあり、そして、戦争の空虚さにあるのです」

そのことがかえって昭和に入ってから軍国ムードに合わず、ラジオ放送などの普及で他の娯楽が台頭したこともあり、琵琶は急速にすたれていったと、藤内は続けている。

ちなみに現在ではYouTubeなどで演奏を視聴することができる。演者によっていろいろな形の演奏があるが、本能寺襲撃のクライマックスでは、人馬のざわめき、弓矢の風切る音、館に放たれた火が揺らぎから次第に紅蓮の炎に燃え盛っていく様が、琵琶の音一つで表現されるのはまさに圧巻である。

大正11年6月4日の昼下がり、緑風の中で奏でられる琵琶曲を、瑛昌院はどのような思いで聞き入ったのだろうか。なお、この年の12月にも忠良は琵琶演奏を檜物町邸で「御聞せ」している。

大正12年9月1日「午後十二時前、非常に気分の悪しき地震ありしと。但し当方にては誰も知るなし。是が東京地方の古今未曾有の大地震とはなりぬ」と日記にあるように、庄内でも地震の揺れを感じた人はいたらしい。

「庄内新報の号外によれば、実に古今未曾有の大災害にして、大東京は大半火災にて焼尽、死傷また何十萬となるや知るべからず。横浜、横須賀は大海嘯、火災にて流焼失せるものの如く」と、地震の情報が書き記されている。中旬くらいまでは東京在住の親戚、縁戚の安否情報などが日記に書かれていくが、それが一段落し始めた9月下旬頃から、瑛昌院と留尾の健康状態の悪化が表面化していった。

9月28日、瑛昌院は高熱を発した。かかりつけの侍医の他に庄内病院の院長の往診を仰いだ。これ以後二週間ほど、二名が夜間交代で泊まり込む体制をとり、懸命な看護が始まった。10月6日「昨夜は八度三分、朝より同じく八度、正午に至り八度六分に昇る。御衰弱加はる。十時重二来診、一時過ぎ院長対診。尿毒症の憂いあり。浅野様御始め御病気御通知をす」

しかし病気の通知を各所に出したその日の夜から、瑛昌院の病状は軽快を辿る。注射や、投薬、酸素吸入が功を奏し、病は峠を越したようであった。その後、知らせを受けた山内家から御見舞いの使者が鶴岡に来たのが10月12日であった。

「山内様の御使者坂本なる人、すなわち御代理として来鶴せるなり。依りて御土産を整え、良

兄様、菅実と共に伊勢屋（旅館）を訪ふ。五時四十分でまたまた帰京する由」

一方、入れ替わるように留尾の方は、一度は回復に向かった体調が悪化していく。

11月中旬、金峰山、母狩山に初冠雪があり、毎年恒例の菜洗いも済んだころ、また瑛昌院は発熱した。慢性肺炎の疑いがあったが、経過を見ると普通の風邪だったようである。それよりも深刻度を増していったのは、留尾のほうである。12月に入って瑛昌院の方はそれなりの回復を得たが、留尾は中旬頃から悪化の一途を辿り、危篤状態を10日ほど持ちこたえたが、ついに12月25日にまだ幼い三人の子を残して永眠した。

28日、前夜からの降雪が一尺ほどある白一色の世界の中で、留尾の葬儀が行われた。12月31日の忠悌日記には「本日も寒気甚し。今は午後十時。木枯らしぞ。多事多変の大正十二年も正に暮れんとす。来るべき年は果たして良き年か。」と記した。寒気と孤独が惻々と迫る。

大正13年（1924）、瑛昌院は時々軽い風邪で発熱したり、胃腸の不具合があったりした。瑛昌院の体調はそのつど回復はするものの、少しずつ消耗していくようであった。9月25日、酒井家家令の加藤宅馬景重が死去した。瑛昌院の八十歳の賀の折、墨と硯をカタにして色紙を書いてもらうよう、微笑ましい策略を巡らした御仁である。

11月3日ころから瑛昌院は軽く発熱した。4日に侍医が診察し「かの昨年肺炎の場所少しくカタルあり。そのためならんと」この日は賢明院の御逮夜なので、手伝いの女性が来て精進料理を整えた。

周辺の山々の頂が白くなり、恒例の菜洗い、冬支度が始まったころ、また瑛昌院の体調は下り坂になった。特に発熱することはないが、食欲が細り、脈に力が無い。侍医は「何分御衰弱の御体、且つ御年寄ゆえ」という見立てで、つまりは「御老衰なので消化の良い食べ物をできるだけ召し上がるようにしてください」と言うしかないのであった。御粥、スープ、牛乳、カステラなどを少しずつ口に運ぶ日々が続き、やがてそれも難しくなっていった。

12月14日未明、いつときの呼吸、脈の切迫の後、医師の到着も間に合わず、瑛昌院は静かに息を引き取った。数え84歳であった。15日に山内家から名代の山崎氏が来鶴し、入棺式は17日、埋葬は21日で「御墓前祭」があり、雪がかなり降ったが風はなく吹雪ではなかったのを人々は幸いとしたり。神道式の葬儀の締めくくりにあたる「御祭典」は22日であった。

大正13年の大みそかは、未明に数センチの雪が降ったが、午後には晴天となった。酒井忠悌は午前中、大督寺に行き、先立った人々の墓前に参拝した。この日訪ねて来た人は「午後、良兄様御来訪。御霊御拝し被下」（「酒井忠悌日記」）くらいで、檜物町邸は門を閉め、床の間に掛け軸を掛けず、ひっそりと静まっていた。

ほぼ2年後の大正15年（1926）12月25日、大正天皇が崩御され、元号は昭和に改まった。

—完—

—あとがき—

筆者の母は102歳余の長寿を以て先年亡くなったが、大正3年に余目町で生まれた。大正13年に数え年84歳で亡くなられた瑛昌院とは、10年間だけだが同じ庄内の空の下に暮らしたことになる。そのことに気づいたとき、天保生まれの歴史上の女性という印象であった瑛昌院が、急に身近に感じられた。大正、明治、慶応と遡って行く時代が現在と地続きになる感覚も味わった。

瑛昌院、山内瑛（山内氏略系図の表記は「鏝」）は庄内史において「悲劇の佳人」とされてきた。幕末の政治社会の混乱の時期、庄内藩の「公武合体派」の政略のお膳立てで、時の雄藩土佐

家から迎えられ、若くして夫に死別し（根強い謀殺説がある）、実家の山内家からの仕送りも次第に細りついは絶えた、という説である。

しかし、それはあくまでも「一説」である。これまで述べてきたように、史料と照らし合わせていくと、酒井忠恕と瑛姫の結婚には政略の色彩は薄く、忠恕は病死の可能性が高い。山内家は瑛昌院にお小遣いとしては十分な額を送金し続けたし、病気を知らされれば名代が見舞いに来て、葬儀にはいち早く駆け付けた。

確かに結婚半年で寡婦になることは悲劇ではある。再婚の道を選ばず、夫の菩提を弔う道を選んだことは、当時の武家の女性が内面化していた一種のモラルからくるものかもしれない。また結婚生活は短くても、長い婚約期間のあったことで、瑛姫は忠恕以外の人を夫として考えられなかったのかもしれない。いずれにしても誰に強制されたのでもない、彼女自身の選んだ道であった。

同時に、瑛姫が酒井家に残ったという事実そのものが、忠恕の死が謀殺ではなかったことの証拠とも言える。山内家も瑛姫の身边に不安や危険の影がなかったからこそ、残るという選択肢を是とし得たのではなかったろうか。

晩年の瑛昌院は実質的な養子の忠悌とその妻留尾、三人の子供達に囲まれて穏やかな暮しをしていた。自然の中に散策しては花を愛で、和歌を作り、琵琶曲を聴き、手すさびの手芸や小物を縫った。病めば手厚い看護を受け、粘り強く回復した。いわゆる蒲柳の質だったかもしれないが、病に気持で負けることがなかったということは、芯の強い人だったのだろう。最後は周囲の人々に感謝しつつ、定命を全うされた。見事な女性だったと思う。

最後に、貴重な日記の一部を見せてくださった酒井忠悌氏の裔の方、様々な資料を提示してくださった鶴岡市郷土資料館に対して、深く感謝の意を捧げたい。